

ピリピ人への手紙3章1-11節 「キリスト・イエスへの誇り」

1A 肉の誇り 1-6

1B 危険な働き人 1-3

2B ユダヤ人としての利点 4-6

2A キリストのすばらしさ 7-11

1B 塵あくたとなる利点 7-8

2B 神の下さる義 9-11

本文

ピリピ人への手紙 3 章を開いてください。パウロは、これまで互いに同じ思いになる勧めを行いました。そして、キリストの思いを抱く勧めを行いました。その思いを抱いているテモテを遣わすことを語り、彼らの教会から遣わされているエパフロディトを急いで送り返すことも伝えています。そこにあるのは、喜びに満ちた交わりです。

しかし、その喜びが少し危うくなっています。同じ思いではなく、確執が教会の中にあつたからです。苦しみを彼らが受けていましたが、その中で主にある喜びではなく、ああこうだと意見の対立が起こっていたのでしょう。その時に危険な誘惑があります。それは、「こうすれば、あなたがたはうまくいく、祝福される。」という教えです。主にある喜びは、神がすべてのことを初めから終わりまで行って下さり、それを私たちの間で、私たちを通して行われていることを、従順になって見ていくことによって存在します。主が成し遂げてくださることに、私たちは明け渡して、ただただ主がすばらしいお方であることを喜ぶのです。

ところが、苦しみを受けているので、それは「これこれをしていないから、苦しみを受けているのだ」として、原因探しをさせる教えが忍び込みます。これは、行いによる救いであり、神に信頼することによって、神が達成される救いではありません。当時、使徒たちの教えに反して、はびこっていたのが、ユダヤ主義と呼ばれるものです。それは、「イエスを信じるだけでは足りません。イエスを信じて、割礼を受けて、モーセの律法を守って、初めて救われるのです。」という教えです。ユダヤ教の中では、ユダヤ人であることによってアブラハムの子孫なので、神の国に入ることができると考えられています。ですから、ユダヤ人になること、正確にはユダヤ教に改宗することによって、初めて神の国に入れます。ですから、異邦人も、神の民の契約のしるしである割礼を受けて、律法を守り行うことによって命を得るのだ、と教えたのです。

異邦人は異教の世界に生きていて、その不道徳や腐敗した姿から立ち直りたいと願っている時に、数々の教え、規則が与えられると人は安心することでしょう。しかし、それは奴隷状態に戻る

だけです。彼ら自身も、異教の儀式やしきたりで縛られていましたが、再びそのような幼稚な教えに戻るようになるのです。異教の世界では、「あなたがたが苦しんでいるのは、神々に仕えていないから罰があつたのだ。」という考えなのです。律法主義に走ることによって、「あなたがたが苦しんでいるのは、律法を守り行っていないからだ。」という、同じ過ちに陥るのです。

ユダヤ主義は、当時の小アジア、今のトルコにはびこっていました。ガラテヤ地方の諸教会は、もう、その教えばかりになってしまっていました。偽りの教えが大幅に受け入れられていたのです。そしてギリシアにも押し寄せていました。コリント人への第二の手紙を思い出してください。パウロが教会にある罪に対処したけれども、それでも彼の使徒としての権威に挑みかかるように煽っていたのが、偽使徒たちであります。ユダヤ主義の教師たちであつたらうと考えられます。パウロが、正統な教師ではない、エルサレムから出た教師ではない。だから、不十分なことしか教えていないのだ。それで、私たちが十分な救いを得ることができるよう教えます、ということなのです。それで、ユダヤ主義に対しては、パウロは猛烈に、使徒であることが神から来たものであることを弁明しなければならなくなってしまうのです。ピリピの教会の人たちに対しては、まだ押し寄せているわけではないですが、予め彼は警告していたようです。今、受けている苦しみの中で対立が起こっていて、そういった偽教師が入り込む危険があるので、彼は改めて警告しています。

教会は弱い時に、霊的に健全でない時に、偽りの教えを見分けられなくなります。問題を持っている人がやって来て、その人たちは滑らかな言葉を使い、人々にへつらいますから、霊的に幼い人や、弱まっている人は見分けられないのです。そして、その偽りが見えている人が見分けると、「あなたは、どうしてそのように強気に出るのですか？大きな問題はないじゃないですか？」と、かえって責められることとなります。これがサタンの思うつぼなのです。分裂や混乱をもたらすことです。ですから、ピリピの教会の人々のために、1章 9-10 節で、「あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが大切なことを見分けることができますように。」と祈っています。

1A 肉の誇り 1-6

1B 危険な働き人 1-3

¹ 最後に、私の兄弟たち、主にあって喜びなさい。私は、また同じことをいくつか書きますが、これは私にとって面倒なことではなく、あなたがたの安全のためにもなります。

ここでの「最後に」というギリシア語は、新しい話題を導入する時にも使われる表現です。共同訳では、「では」と訳しています。「主にあって喜びなさい」と勧めています。状況が良くなっているから喜びなさいではなく、主にあって喜びます。キリストにある喜びで、この方との関係、交わりにある喜びです。それが、福音の喜びですね。

そして、これから「同じことをいくつか書きます」と言っています。偽りの教師たち、働き人について書きますが、これはピリピの人たちに何度となく書いてきたことです。けれども、自分にとって面倒なことではない、と言っています。彼らの安全のためになるからです。私たちは、知っていることでも思い起こすということが必要ですね。何度も聞いたことがあるけれども、それでもまた思い起こす。ペテロも、第二の手紙で「1:12 ですから、あなたがたがこれらのことをすでに知り、与えられた真理に堅く立っているとはいえ、私はあなたがたに、それをいつも思い起こさせるつもりです。」と言っています。

² 犬どもに気をつけなさい。悪い働き人たちに気をつけなさい。肉体だけの割礼の者に気をつけなさい。³ 神の御霊によって礼拝し、キリスト・イエスを誇り、肉に頼らない私たちこそ、割礼の者なのです。

パウロは、かなり強い語調で偽教師たちを断罪しています。ユダヤ人たちの持っている誇りをもって、異邦人を侮蔑している表現を意趣返ししています。彼らはユダヤ人であることを、その肉を誇っているのですが、何を言っているのか？あの者たちこそが異教徒のように生きているのだ！と断罪しているのです。

まず、「犬ども」というのは侮蔑の言葉で、ユダヤ人が異邦人を「異邦人の犬」と罵りました。それを彼らに使っているのです。そして、「悪い働き人」というのは、「悪を行う者」ということですが、詩篇 119 篇 115 節を念頭に入れているのかもしれませんが、「悪を行う者どもよ 私から遠ざかれ。この私は私の神の仰せを守る。」悪を行うことに加担することがないように警戒し、そして自分自身が神の仰せを守ると決めている姿です。それから、「肉体だけの割礼の者」というのは、良くない訳だと思えます。ギリシア語で「割礼」の言葉を使っていないのです。そうではなく、「切除する者」ということです。肉体の一部を切除する者であります。律法では、体を傷付けることに対する戒めがありますが(レビ 19:28)、それは異教の慣わしで体に傷つけるものがあるからですね。バアルの預言者が、エリヤとの対決で自分の肉体を傷つけていました。そういうものから離れなさいという戒めです。彼らは、割礼、割礼と言っているが、彼らこそが異教の慣わし、切除をしているにすぎない、と言っています。

パウロは、律法の本質のところ「割礼」を置いています。それは「心が一新することだ」ということです。「申 10:16 あなたがたは心の包皮に割礼を施しなさい。もう、うなじを固くする者であってはならない。」肉の割礼を受けていても、心の割礼を受けていなければ、無割礼と同じであることをロマ 2 章で話していますね。

どのようにして、心が変えられるのでしょうか？それは、神の御霊が心に与えられることです。「エゼ 36:26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあな

たがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。」ですから、ここでパウロは、「神の御霊によって礼拝」すると言っています。イエス様は、サマリアの女にも、「しかし、まことの礼拝者たちが、御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。」と言われましたね(ヨハ 4:23)。

そして、自分を誇るのではなく「キリスト・イエス」を誇ります。ここが、パウロが 3 章前半で強調したいことです。イエス・キリストがどれほど素晴らしい方なのか、そのすぐれた方をほめたたえ、誇りたいのに、この悪者どもは、この方の義を自分たちの卑しい、偽善に満ちた義に取り替えようとしているという、非常に強い拒否感、嫌悪感を表しているのです。自分自身の誇れることをとりあげて、自分で思いっきり引き下げます。得であったものがすべて損であり、塵あくた、屑だと思っている！と言っているのです。イエス・キリストのすばらしさに比べたら、自分の最善にももの、屑でしかないのです。

私たちはどうしても、人々が良いことをしているのだから、キリストを信じる以外にそれらを付け足してもよいだろうと考えてしまいます。イエスを信じるだけでは足りなくて、他にも律法を守り行おうとしても、なぜそんなにいけないのか？と思います。それは、神の永遠のご計画を壊すからです。永遠の昔から立てていた計画があります。それはご自分の子の犠牲によって、その死によって、人々が救うようにするご計画です。人が何も良いものがなく、救いようがないから、だから神はご自分の御子のいのちを与えるという、究極の犠牲を支払われました。その完全な救い、究極の救いを、「いや、もっと自分の行いを付け足したほうが良いと思います」として、ぶっ壊すからです。これほど、神の完全なお働きを侮辱することはないのです。

そして、「肉に頼らない」のです。肉というのは、自分に生まれてからある素質や利点です。生まれてからある力や知恵であります。御霊によって新しく生まれた人にとって、罪を犯してしまう時に、肉の欲に魅かれることがあります。けれども、肉はそれだけでなく、新しく生まれたのに、キリストに信頼して生きるのではなく、未だに自分の力で神に到達しようとするのも、肉であります。その肉を欲望とともに十字架につけてしまったのが、私たちキリスト者です。パウロが、どのように自分の肉を十字架に付けているかを、この後の姿から見ることができます。

2B ユダヤ人としての利点 4-6

⁴ ただし、私には、肉においても頼れるところがあります。ほかのだれかが肉に頼れると思うなら、私はそれ以上です。

ユダヤ主義者らが行っていたのは、自分がユダヤ人であることを誇り、またユダヤ教に熱心であることを誇っていました。割礼を受けている。エルサレムから来ている。自分はイスラエル人。割礼は神の民であることのしるしだ。律法は熱心に守らなければいけない、というものです。しかし、律法主義の人たちにある特徴があります。それは、「自分自身が守れていない」ということです。

パリサイ人の律法の解釈を、山上の説教でイエス様がことごとくぶっ壊されたのを覚えていますね。彼らは厳格に守っているようで、実は守っているように見せるために、いろいろ細工しているのです。人が律法主義になると、自分がことさらに主張していることについて、自分自身が守られていないことを薄々分かっています。それで、人には良く見せるために守っているようにしていますが、内実がともなっていません。そして他者に強要します。

しかし、パウロは、ユダヤ人であること、また自分自身が律法を厳格に守る者でした。ユダヤ主義者らが誇っていることなどみみちくなるような、はるかに先を進んでいた人でした。スポーツ選手でいうならば、県大会で選出された人が威張っているところで、オリンピックに選抜された人の話をしている、という感じです。パウロは、ユダヤ人の世界ではエリート中のエリートです。その世界の代表的な人物だったからこそ、律法を守り行えないことをよく悟ることができました。

^{5a} 私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、

ここにあるのは、パウロが何かをすることはできない出自であります。彼の両親また先祖についての誇りです。まず、割礼を受けていますが「生まれて八日目に」受けています。これは、モーセの律法に書かれていることですが、ユダヤ主義者らの中には途中で改宗して大人になってから割礼を受けた者たちもいたことでしょう。そこですでに格下げになるのです。パウロは八日目に受けています。そして、「イスラエル民族」であります。しかも、「ベニヤミン部族の出身」であります。イスラエルの初めの王サウルがベニヤミン出身でした。そして、イスラエルがソロモンの死後分裂した時に、ユダ族についていきました。そして、神殿のあるエルサレムはベニヤミン領の南境にあります。

それから、「ヘブル人の中のヘブル人」とあります。当時、ユダヤ人の世界は、古からのヘブル人の伝統を守っている、ヘブライ的ユダヤ人がおり、ギリシア世界の影響を受けた、ヘレニスト的ユダヤ人がいました。後者の人たちは、前者から異邦人的である、異教徒的であるとして見下されていました。パウロは、ヘブライ的ユダヤ人の中にいたのです。タルソは、非常にギリシアの文化と学問が発達した町でありましたが、パウロはしっかりと、ユダヤ人両親からギリシア化から守ら得て、ヘブル的な生活をしていたと思われます。

^{5b} 律法についてはパリサイ人、⁶ その熱心については教会を迫害したほどであり、律法による義については非難されるところがない者でした。

出自から、自分自身の律法に対する熱心さを取り上げています。「パリサイ人」とありますが、彼らこそが、当時のユダヤ人の世界で、最も律法を厳格に守る人々として認められていました。その名も、「分離した人々」ということです。律法を守ることで、他の汚れたものから離れ、神だけに属し

ているとされていました。使徒 22 章 3 節には、パウロはガマリエルの下で律法を学んだと書かれており、ガマリエルは当時、もっとも優れた教師とみなされていました。

そして、「その熱心については教会を迫害したほど」と言っています。ステパノへの石打ちに同意し、そしてキリスト者たちを捕縛し、また打ち叩きました。イエス様が、弟子たちに前もって警告しておられたとおりです。「ヨハ 16:2 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。」それから、「律法による義については非難されるところがない者」と言っています。これはすごい発言ですが、彼は実際にそうでした。しかし、イエスの義、律法の成就是それをはるかに超えたものであり、パウロは、ローマ 7 章で述懐していますが、全くの罪人だと気づきます。「7:14 私たちは、律法が霊的なものであることを知っています。しかし、私は肉的な者であり、売り渡されて罪の下にある者です。」なのです。パリサイ人の律法の義は、外側の行ないに集中していましたが、キリストご自身はそれを内なる態度も含む行ないであることです。つまり、人を殺していなくても、人を憎んでいたらそれで殺人の罪を犯したことになります。それで彼は、とんでもない罪人であることを悟ったのです。

2A キリストの知識のすばらしさ 7-11

パウロは、このようにして、ユダヤ主義者らが比べることもできないほど、彼らの誇っていることを、何倍にもして誇ることができるのです。しかし、これらの高いそびえた塔を、パウロ自身が一気にぶっ壊します。それは、キリストのすばらしさの前ではあまりにも醜いほど、キリストがすばらしいからです。

1B 塵あくたとなる利点 7-8

⁷しかし私は、自分にとって得であったこのようすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。

パウロが、なぜこれらを損と思っているのか？それは、このような得であったと思うことが誇りとなっていて、キリストに至らないという問題があるからです。キリストの十字架の前では、自分の義は全く通用せず、神の義の前でそれらは不潔な着物のようであり、全くの罪人なのです。ところが、これら得だと思っていること、誇っていることがあればあるほど、十字架の前に来るのを妨げてしまいます。イエス様は、遊女や取税人が悔い改めてご自身のところに来るのに、パリサイ人やサドカイ人のユダヤ教指導者が来ないことについて、悔い改めることができていない問題を取り上げておられます。

ですから、ユダヤ人として持っているもの、彼がパリサイ人として生きてきたこと、そして出自そのものを否定しているのではありません。むしろ、ガラテヤ書 1 章 15 節には、「母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださった神」とパウロは言っています。彼が生まれた時か

ら、神が選び出してくださっていました。彼がユダヤ教に熱心であったからこそ、聖書に精通し、福音宣教者として既に整えられていました。律法に熱心だったので、律法がただ罪の自覚を与えるのみで、義とされることはないと悟ることが出来ました。恵みによる救い、信仰による義をよく知っていました。そして彼は、ギリシア文化の濃厚な町で育ちました。ギリシア語に精通し、その文化や彼らの思考も分かっていました。そして、生まれながらのローマ市民です。ローマの広域に福音を伝える時に、市民権を行使して法的に守られたことも多々あります。

主は、信じる前のものを、お用いになります。しかし、それらが誇りとなっていて十字架に来るのを妨げるのであれば、それはすべてキリストのゆえに損になるのです。

^{8a} それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくたと思っています。

「私の主であるキリスト・イエスを知っている」ということが、いかにすばらしいかを、パウロは語っています。この方を知っているところに、大きな喜びがあります。喜びなさいというパウロの勧めは、すべて主にあって喜びなさいというものです。ここに喜びの泉があります。

そして、彼はすべてを失いました。おそらくユダヤ人の家族を持っていたでしょうが、離婚して、子供とも離れなければいけなかったでしょう。ユダヤ人たちの共同体から切り離されました。これまでのものを全て失いましたが、どうでもいいと思っています。大胆にも「ちりあくた」と言っています！共同訳は「屑」と訳してくれていますね。ギリシア語の意味に少し近づきました。もっと直訳しましょう、「糞」です。それらは糞だと思っている、ということです。

2B 神の下さる義 9-11

^{8b} それは、私がキリストを得て、⁹ キリストにある者と認められるようになるためです。私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つのです。

キリストを得るということが、彼の追及となりました。それはどういうことか？と言いますと、「キリストにある者と認められる」ということです。キリストのうちにあるという立ち位置こそが、彼にとっての人生になったのです。これは、キリスト者になったらもっと良い人になる、というような個人修養の話とは、全く異なります。自分が生きている時に、キリストの中にいるのです。神が私を見る時に、私を直接見るのではなく、キリストにあって見てくださるのです。ですから、祝福があるのです。そんなの受ける資格がないのに、なぜか流れてきます。一方的な恵みなのです。

そして、もはや自分の義によって生きません。このキリストに信頼する生き方になります。そして義については、自分自身から出てくるものではなく、神から贈り物のようにして与えられるものなのです。自分が今、正しくなろうとするのではなく、義なる方キリストに信頼していくのです。そして義そのものは、キリストが来られる時、神から義を与えられる時に受け取るのです。

¹⁰ 私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、¹¹ 何とかして死者の中からの復活に達したいのです。

パウロは、一度イエス会って、この方を知りました。けれども、彼はそれだけで満足しませんでした。彼は全生涯で、この方を知ることによって命をかけた。ここに、前回お話ししましたが、天国の過ちがあります。天国に行ける切符をもらうことが救いなのではない、とお話ししました。この地上にいる間、この方を知ることこそが私たちの生きがいになっているのです。死んでから天国に行くというのではなく、この地上にいて、キリストにあって天を味わうことが必要なのです。

そしてそれは、この方が復活して、今、生きておられるということ、この方のなされることに従順になることによって味わっていきます。私たちはどうしても、知識を得ることには貪欲ですが、従順になることに貪欲ではありません。そのまま行っていくことによって、生きたイエス様が働いてくださいます。例えば、御霊に導かれて、あの人に語っていき、時間を過ごして行こうとします。すると、そこにイエス様がおられることに気づくのです。教会で、ここの部分で仕えるように導かれている感じがする。そうすれば、それを行ってみてください。そこから、仕えるイエス様がおられることを知るでしょう。

そして、苦しみ of イエス様にもあずかります。ご自身を主張なせずに、むしろ自分を捨てて、父なる神に従われたイエス様です。私たちも、キリストにあって与えられる苦しみがあるならば、そこで、人知を超えたところの主との交わりが与えられます。苦しみを受けた人は、主の教えを知ることができたということが、詩篇に書かれています。

そして最後に、肉体の死を経ても、それがよみがえることを切に願っています。初めから終わりまで、キリストにあずかりたいというのがパウロの願いなのです。キリストのうちにいるので、この方がおられるところに自分がいるので、この方を知るところに喜びがあります。自分が何をしてきたか、とか、はっきりいって糞です。どうでもいいことです。肉的に、この人はああだ、こうだということはやめましょう。また自分がああだ、こうだということもやめましょう。主にある喜びを、しっかり抱いていきましょう。

次回、ピリピ 3 章の後半では、終わりの時に受ける賞について見ていきます。終活という言葉が世の中では流行っていますが、私たちキリスト者こそ終活を知っている生き物です。